

## 依頼表現の異文化比較（日中）

### —ポライトネスの視点から中間言語を探る—

#### Request Strategies in Japanese and Chinese; A Contrastive Study of the Interlanguage of Chinese Students of Japanese from Viewing Politeness.

林 賀代\*

Kayo HAYASHI

#### <要旨>

本研究では、中国人非日本語学習者と中国人日本語学習者、日本語母語話者の依頼表現の変化について見ていく。特に学習者の在日年数、日本語能力による依頼ストラテジーの比較対象とする。学習者の中間言語に対する目標言語である日本語の影響を調べるために、中国語話者を三つのグループに分け、依頼相手の感じる負担度の度合いが異なると考えられる4つの場面を設定し、親疎上下関係の異なる相手に対して、どのように表現するかについてストラテジーの検証を行った。

キーワード：キーワード：依頼、ストラテジー、ポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・ポライトネス

#### はじめに

依頼表現とは日々の生活で欠くことのできない言語活動であり、その用途、場所は多岐にわたる。また、依頼相手との関係や相手が負うであろう負担などに対しての配慮も考慮し、スムーズに依頼したい内容を相手に伝えるというストラテジーには、文化的背景が大きく影響していると考えられている。

本研究では、日本語と中国語の依頼に関するストラテジーの比較対照をするが、特に中国語話者の依頼方略に日本語の依頼方略がどう影響するかを探っていく。比較対照する言語に中国語を選んだのは、現在多くの中国人留学生が来ており、さらに中国の経済発展、政治的かつ歴史的摩擦などメディアを通してよく目にし、社会的関わりも深くなっていくと思われるからである。

中国人日本語学習者の中間言語に対する目標言語である日本語の影響を調べるために、中国語話者を三つのグループに分けた。日本在住歴のない中国在住中国語話者、さらに日本在住歴5年以上の者、日本語一級能力資格未取得の学習者、日本語一級能力試験合格の学習者に分けた。そして、依頼の四つの場面を設定し、親疎上下の異なる対話相手に対しどのように依頼するか、自由記述の質問紙調査を行った。

日本語の依頼表現ストラテジーはどのような形式

が用いられ、スムーズに依頼内容を達成しているのか、中国の依頼表現とはどのような相違があるのかを先行研究の知見も参考にしながら明らかにし、少しでも日本語学習者の役にたちたいと思っている。

#### 目次

- 第1章 依頼表現とは
- 第2章 日本語と中国語の依頼方略について
- 第3章 依頼表現についての調査
- 第4章 考察

#### 第1章 依頼表現とは

##### 1.1 依頼とは

私たちは日常生活においてコミュニケーションを円滑に行うために、さまざまな工夫をしている。その中でも依頼行為は「自己の実現したい事柄を他者の好意による行為によって叶えられるよう働きかける表現行為」と規定でき、そのような相手にあることを求めるという行為は、両者の社会的権力差などの上下関係や、知人関係における親密度、また依頼相手の負担度を考慮し、その相手が否定的な感情を持たない配慮をする必要がある。配慮を示す方法はさまざまあるが、相手との関係を良好に保ちつつ依頼の目的内容を効果的かつスムーズに達成するた

\* 本学大学院教育学専攻修士

めにも、さまざまなストラテジーを用いている。

また、山岡、李（2004）は依頼の表現形式とそこに込められた配慮について考察し、以下のように語用論的条件と依頼表現について分類をしている。

（1）依頼という発話機能を判断する基準とする語用論的条件

1. 命題内容が表す行為Aは、聞き手にとって実行可能な行為である。
2. 通常の事態の進行において聞き手が行為Aを実行することは自明のことではない。
3. 話し手は命題内容の実現を欲している。
4. 行為Aの実行は話し手の利益をもたらす。

この中で、特に条件4が依頼表現が成り立つのに必須不可欠の弁別要素である。すなわち、相手の行為が話し手自身の利益となるような、そういう行為の実行を相手に促すとき、それを「依頼」と呼ぶのである。発話状況の中でこの条件が満たされていなければ、命令、忠告、助言等、別の発話機能となる。

（2）語用論的条件をもとに表現系による依頼表現の分類

①遂行文系依頼表現 → 遂行文とは、発話することが、その文が示す行為の遂行に当たるという特殊な文のことを指す。例えば、「(お先に失礼しますので) 後を頼みます」は、依頼の予告でも依頼の決意でもなく、まさに「依頼行為」そのものである。

②疑問系依頼表現 → 疑問表現がなければ依頼表現にならないようなものを「疑問文系」の依頼表現と呼ぶ。依頼表現において疑問文を用いるということが配慮に起因している。疑問文というのは、相手に返答を求めるものであるから、それに応じるか否かの決定は相手に委ねられ、拒否という可能性もある分、相手の積極的フェイスに配慮している。

③願望系依頼表現 → 「～てもらいたい」「～してほしい」のような願望表現が、相手に対する依頼として機能するような場合の依頼表現、願望文の形をとることによって、婉曲的な依頼となる。相手にかかる負担を軽くしようとする配慮によって、この表現形式が取られる。

④命令文系依頼表現 → 本来命令は、話者の自己利益が含意されておらず、聞き手に対して強制力を行使しようとするものであり、依頼とは一線を画す。しかし、語用論的に自己利益が含意されることによって、依頼となる可能性がある。その場合を「命令文系依頼表現」とする。

⑤条件文系依頼表現 → 依頼表現の一種に、条件節を用いて婉曲的・仮定的に表現する。日本語では、「Vてもらえるとありがたいです」「Vていただければ幸いです」などを多用する。これらの表現は、依頼というフェイスを脅かす行為に対する最大限の配慮が表現されている。

このように、「依頼」は相手の行為が話し手の利益となる行為の実行を促す言語行為であるが、その表現形式は多様である。それは、話し手が依頼を行う際にさまざまな要因に配慮し、発話効果を高めるために、表現を工夫しながら依頼を行うためである。

## 1.2 依頼方略の分析

ここでは依頼に関わる要因、そして依頼表現を分析する上で重要となる分析方法について書く。

### 1.2.1 依頼方略の質問紙調査

李（2006）は、相手との上下・親疎関係を組み合わせた依頼の言語行動が行われる各場面でのポライトネスを表わす意識について明らかにし、その上で特に調査内における「目上の人に依頼する」場面に焦点を当てながら考察を加え、日中語における依頼の言語行動の相違を、自由記述による質問調査と、5段階の評定を行う選択式の意識調査の組み合わせによって検討している。

調査は、口頭表現を記述する「質問紙調査」、各依頼場面でのポライトネス意識を問う「依頼場面における意識調査」を、日本語母語話者94名と台湾人中国語母語話者94名に行った。「質問紙調査」では、表1の四つの場面を文章で示し、各場面はどう依頼するかを記入するというものだ。

表1 依頼場面における意識調査の場面設定

	上下関係	親疎関係	場面
場面①	上	親	親しい指導教員に本を借りる場面
場面②	上	疎	親しくない同じ学科の教員に本を借りる場面
場面③	同	親	親しい同じ学科の友人に本を借りる場面
場面④	同	疎	親しくない同じ学科の友人に本を借りる場面

調査の結果、日本語と中国語を比較すると、配慮度、間接度、改まり度について同様の結果が表れている。しかし、親近度、距離度については違いが見られる。中国語では、親近度および距離度には、上下関係より親近関係が影響を及ぼしているが、日本語では、上下親疎ともに同じように影響している。日中語とも配慮度および改まり度については、上下関係に影響されやすい。この調査結果は第2章で紹介するが、依頼には上下親疎という要因が影響し、依頼方略に関わっていることがわかる。

### 1.2.2 インタビューによる依頼方略の調査

エレン・ナカミズ（1992）は日本語学習者の依頼表現におけるストラテジーの使い方についての研究の中で以下のような調査を行った。

日本人大学生30人、日本の大学に通っている中国人留学生22人、韓国人留学生15人、アメリカ人留学生17人を対象として、調査用紙を渡し、その場で答えてもらい、内容を確認するために何人かには直接口頭で質問を行った。

インタビュー・シートを作成する上でエレン・ナカミズ（1992）は以下の3点を要因として設定した。

- 1) 親疎関係：話し手と聞き手との親しさの度合いは、依頼の仕方にどのような影響を与えるのか。
- 2) 非対称的な関係：聞き手が目上の人である場面に出てくるストラテジーは親疎関係だけが要因になっている場面のストラテジーとどう違うのか。
- 3) 依頼の負担：依頼負担の高低でインフォーマントがどのようにストラテジーを使い分けているのか。

この調査の結果、親疎関係が重視される場面では、日本人話者の場合、依頼表現の形式は切り替えるが依頼表現以外のストラテジーはほとんど切り替えない。それに対し、中国人とアメリカ人学習者は、語形よりも「常体」と「丁寧体」との間で切り替える人が多い。また、聞き手が目上の人である場面では、日本人、外国人話者どちらにおいてもストラテジーの切り替えが少なく「願望表現」の使用頻度が高い。そして、依頼の負担が高い場面における結果は、聞き手が親しくないクラスメートの場面の結果に近い。日本人、韓国人学習者は、ある語形からもっと丁寧さの高い語形への切り替えが多く、中国人、アメリカ人学習者は語形よりも、「常体」から「丁寧体」への切り替えが多い。しかし、一般的に韓国人学習者の回答は、中国人、アメリカ人学習者の回答からは遠く、日本人話者のストラテジーに近い傾向があ

る。韓国語は最も日本語に近い言語であるため、ストラテジーの使い分けが日本人に近いと思われる。しかし、韓国人学習者の回答にぼかし表現は少なかった。このことは、学習者の専門分野、日本語学習歴、勉学の目的などの影響だと考えられる。

このように言語表現に関する調査には、上下関係、依頼の負担度が影響することが先行研究で指摘されている。そして、調査方法には、アンケート調査、ロールプレイ調査、インタビュー調査などが用いられる。本研究では先行研究に倣い、上下関係、依頼の負担度により場面を設定し、場面毎でどのように依頼するのかを書いてもらう自由記述によるアンケート調査を行うことにした。また、分析を進める過程で、随時母語話者へのインタビュー調査を加えた。

## 第2章 日本語と中国語の依頼方略について

本章では、本稿で扱う日本語と中国語の依頼表現について概観したい。日本語と中国語の母語話者の依頼表現を比較した対照研究をとりあげ、次に中国人日本語学習者と日本語母語話者の依頼表現を概観するが、これは母語の言語文化と対照言語の言語文化の干渉を探る、中間言語方略研究にあたる。

### 2.1 日本語と中国語の依頼方略の対照研究

日本語の母語話者と中国語の母語話者は、それぞれの言語文化圏でどのように依頼を行っているのか、日本語と中国語の依頼表現を扱った対照研究を見ていきたい。

#### 2.1.1 依頼の言語行動に関する日中語対照研究一ポライトネスの観点から一

李（2006）の「依頼場面における意識調査」では「質問紙調査」で提示された各場面に対しどのような意識を持っているかについて、五つの「ポライトネスの軸」を援用し、五段階の評定をしてもらうというものだ。調査表にⅠ「配慮の軸」Ⅱ「間接性の軸」Ⅲ「親近性の軸」Ⅳ「距離の軸」Ⅴ「改まりの軸」の五つの「ポライトネスの軸」を提示した。

（1）調査の結果分析および考察

①「依頼の場面における意識調査」の結果分析および考察

日本語の場合、検証方法としては、配慮度、間接度、親近度、距離度、改まり度を見るために、フリードマン検定、また、どの場面の組み合わせに有意差

があるかを見るために、スティール・ドゥワズ検定による多重比較法を用いた。

意識調査では、日中語ともに相手のフェイスの保持に配慮するという「ポライトネスの普遍的原理」、間接に表現する「オフ・レコード」、距離を置く「ネガティブ・ポライトネス」、改まりを示す「わかまへのポライトネス」の結果について同様の結果が表れている。しかし、親近感を示す「ポジティブ・ポライトネス」、距離を置く「ネガティブ・ポライトネス」の度合いには違いが見られる。中国語において上下関係より親疎関係が、親近感を示す「ポジティブ・ポライトネス」距離を置く「ネガティブ・ポライトネス」の度合いに影響を及ぼしている。

「目上の人に依頼する場面」では、日中語共に親しい指導教員に依頼する場面①では「ポライトネスの普遍的原理」、「オフ・レコード」、「ネガティブ・ポライトネス」、「わかまへのポライトネス」を表わす意識は、親しくない教員に依頼する場面②より、低くなるが「ポジティブ・ポライトネス」を表わす意識のみが場面②を上回る。目上の人に依頼する場面におけるポライトネス意識の強弱については、日中語同じ傾向を示しているが、相手との親疎関係によって同一の機能的な発現頻度の増加と数種類の機能的な単位の使い分けに違いが見られた。

### 2.1.2 依頼のストラテジーの中日対照

楊（2004）は中国と日本の大学生の書いた依頼文を分析し、両者の依頼のストラテジーの違いと中国人日本語学習者の中間言語の特徴を検討した。

#### （1）調査概要

調査内容は、被験者120名に外国へ留学したいという前提で、あまり親しくない高校時代の同級生に相手のいる外国の有名な大学のパンフレットを送ってもらうための手紙を書いてもらい、そこで産出されたストラテジーを分析するというものだ。

被験者は4グループ30名ずつに分け、それぞれ中国語と日本語で手紙を書いてもらう。第1グループは、中国にある英語学部3年生（中国語母語話者）このグループには、中国語のみで手紙を書いてもらう。第2グループは、同大学日本語学部2年生（日本語学習歴約1年半、初級学習者）。第3グループは同大学日本語学部3年生（日本語学習歴約2年半、中級学習者）。第4グループは、日本にある日本語教育コース学部生（日本語母語話者）。この第2、第3及び第4グループは日本語で記述してもらう。

#### （2）考察

##### ①主依頼ストラテジー

まず主依頼ストラテジーを直接依頼と間接依頼に二分する。ここで言う主依頼とは、パンフレットを送ってもらうよう依頼する表現である。

「一てください」や「一をお願いします」のような表現を直接依頼、依頼を承諾する可能性を聞く「一ていただけませんか」や希望を述べる「一ていただきたい」のような表現を間接表現とみなす。

中国人も日本人も本調査の条件では、同じように間接依頼のほうがポライトな頼み方だと思っていることがわかった。日本人にとって、あまり親しくない同級生に「一てください。」と依頼するのは考えにくいだが、中国人の場合極少数ではあるが直接依頼で相手の仲間意識を喚起する傾向が見られた。

##### ②ポジティブポライトネス

「感謝」「お祈りで結ぶ」「褒め」「うらやましきの表現」「仲の良さの強調」「近況の報告」「お返し」の表現」「受ける恩恵の明示」の八種類のポジティブポライトネスが産出された。

中国人の書いた手紙の中には「感謝」の表現がよくみられる。前もって感謝するのが相手の承諾を確信している明示であり、双方が信頼関係にあることが強調される。手紙文の終わりにみられるお祈りは、相手への関心を示し、褒めるということは相手の認められたいというポジティブフェイスを満足させるストラテジーである。相手へのうらやましい気持ちを伝えるのは、間接的に相手が好ましい状態にあることを認めることであり、「褒め」と同じ働きだといえる。依頼者をあまり親しくない同級生に設定したにも関わらず、相手との仲の良さを強調する表現が多く産出され、これは相手の仲間意識を喚起する役割をし、自分の近況を知らせることも同じである。

「受ける恩恵の明示」はネガティブフェイスとの見方もできるが、相手が恩恵を施す能力があるともとれ、これにより相手の認められたいというポジティブフェイスを満足させると考えられる。

##### ③ネガティブポライトネス

「相手の気持ちや時間への配慮」「お詫び」「前置き」「送料の配慮」「事情の説明」の五種類のネガティブポライトネスが産出された。

相手の気持ちや時間への配慮で相手にかかる負担を最小限にする。お詫びをするのは相手に負担をかけることに気づいていることの表明である。依頼表現の前置きは、相手に心の準備をしてもらう役割で

ある。また、「送料の配慮」は一見「お返し」と同じようであるが、これは相手にかける金銭的負担をなくす配慮である。事情の説明により、依頼しなければならないことを相手に理解してもらい心理的負担を軽減するといえよう。

(3) まとめ

本調査の結果は以下のようになった。

1. 中日の主依頼ストラテジーは直接依頼にほぼ一致しているが、補助ストラテジーにははっきりした違いが見られた。
2. 中国人の依頼は感性的であり、ポジティブポライトネスを多用し、日本人の依頼は理性的であり、ネガティブポライトネスを多用する。
3. 学習者の中国式ストラテジーの使用率は学習歴とともに減少する傾向にある。

4. 学習者のネガティブポライトネスの使用率は学習歴とあまり関係がない。
5. 中国も日本も女性のほうがポライトネスの使用率は高い傾向にある。

2.1.3 依頼表現の日中対照研究—相手に応じた表現選択—

相原（2008）は、相手との親しさと相手の地位が依頼表現にどのように反映されるかについて、日本語と中国語を用い比較、分析している。

(1) 調査内容

依頼場面を設定した質問紙（日本語版と中国語版）を日本語母語話者51名と中国語母語話者49名に配り、どのように言うか記述してもらおうというものである。依頼相手の設定は表2に記した通りである。

表2 依頼相手とその略記法

親疎	地位	具体的な人物設定	略記法
挨拶程度	上	会えば挨拶する程度の間柄の教授	疎・上
	やや上	会えば挨拶する程度の間柄の一、二歳上の先輩	疎・やや上
	同	会えば挨拶する程度の間柄の同学年、同年齢の学生	疎・同
親しい	上	親しい教授	親・上
	やや上	親しい一、二歳上の先輩	親・やや上
	同	同学年、同年齢の親しい友人	親・同

依頼内容は「写真を撮ってもらおう」というものを、「卒業式の日、校門の前で、誰かに頼んで何人かで記念撮影をしたいという時に、表2の人物が偶然通りかかった」というものだ。

(2) 分析

①文のタイプ、分類方法

両言語の依頼表現を直接か間接かという視点から二つのタイプに分類し「直接依頼文」「間接依頼文」と呼ぶ。日本語では、両形式の比較は相手によって異なるが、「親・同」においても間接依頼文の出現率のほうが高く、相手に関わらず間接依頼文が多い。これに対し、中国語では、「親・同」と「親・やや上」では、間接依頼文の出現率が高く、それ以外の相手では間接依頼文の出現のほうが高い。親疎差も地位差も中国語のほうが大きい。従って中国語のほうが日本語より直接依頼文を用いるかの選択に、相手との親しさと相手の地位が関わると言える。

②受理表現のタイプ

話し手が利益を得ることを明示する表現を「受理表現」と呼び、相手の違いが受理表現の選択に与える影響を見ていく。

日本語では与え手主語タイプの授受動詞を使うか受け手主語タイプの授受動詞を使うかという選択に相手との親しさと相手の地位が大きな影響を与える。これに対し、中国語の各受益表現の出現率は、相手が違っても大きな変化は見られず、調査で設定した依頼場面については、相手の違いは受益表現の選択にほとんど影響を与えていないと思われる。

③敬語の使用

相手との親しさと相手の地位が敬語の出現率を大きく左右するという点は日本語も中国語も同じだが、中国語では二人称代名詞が現れない回答が多く、敬語形と非敬語形の選択自体がないケースが多い。

(3) まとめ

①文のタイプ

日本語では、直接依頼文と間接依頼文の比率は変化するものの、どの相手においても直接依頼文よりも間接依頼文の出現率が高いのに対し、中国語では相手によって間接疑問文を使うか直接疑問文を使うかがはっきりしている。この結果は、中国語の方が、相手との親しさや相手の地位が、間接疑問文を使うか直接依頼文を使うかという選択に大きな影響を与

えているということを示している。

## ②受益表現のタイプ

受益表現の選択には親疎や地位の影響がほとんど見られなかった。

## ③敬語の使用

日本語では、相手との親しさと相手の地位が敬体か常体かの選択に深く関係している。一方、中国語では二人称代名詞が使用された回答が少なく、その選択自体が起こっていないケースが多い。

### 2.1.4 依頼表現の日中対照研究

山岡・李(2004)は日本語と中国語における表現形式とそこに込められた配慮について、両者を比較しながら、共通点・相違点を考察している。

依頼表現の類別は、日中語共に①遂行文系②疑問文系③願望文系④命令文系⑤条件文系の5つに分類される点で共通している。配慮の度合は、依頼の意味の露出度、すなわち直截的な表現よりは婉曲的な表現の方が消極的配慮の度合が高く、依頼される側が断りやすい発話であるほど、積極的配慮の度合が高い。従って、各系の基本的形式をもとに配慮の度合を考えると、④→①→③→②→⑤の順で高くなっていくと考えられる点も両語は共通している。

日中語における最大の相違点は日本語には配慮を表現する派生的な文法形式が多数存在するのに対し、中国語にはそのような文法形式が少ない。例えば、日本語の「～てもらおう」と「～ていただく」、「～てくれる」と「～てくださる」のような待遇表現上の区別、常体と敬体のような文体上の違いに相当するものが中国語には見当たらない。ただし語彙の交替という形をとって中国語にも存在する。このような事情は依頼表現に限らず両語の対照全般において従来から知られていることでもであると述べている(山岡・李、2004参照)。

### 2.2 日本語と中国語の中間言語方略研究

中間言語とは第二言語学習者が、母語とは違う言語を学んでいく過程で発生する、目標言語とはさまざまな点で異なる学習者に起こる言語のことである。ラリー・セリンカーによって1972年に提唱され、全ての言語学習において、学習内容や母語による影響を受け個々の中間言語が存在する。中間言語は、習得レベルや学習内容、母語などに影響を受ける。例えば中国語を母語とする者が話す日本語は、日本語を母語とする者とは違う。清音、濁音の発音が少し

違っていたり、中国語「的」が干渉し、「白いの本」など特定の表現が多く用いられたりする。このように、ある一定の規則を持ちながらも、目標言語とは異なっている学習者の言語を中間言語という。

#### 2.2.1 日本語学習者における依頼表現—ストラテジーの使い分けを中心として—

エレン・ナカミズ(1992)は、日本語学習者における依頼表現について、母語に注目し調査を行った。

##### (1) 調査方法

アンケート。日本人大学生30人、日本の大学に通っている中国人留学生22人、韓国人留学生15人、アメリカ人留学生17人を対象として、調査用紙を渡し、その場で答えてもらい、内容を確認するために何人かには直接口頭で質問をした。

##### ①アンケートを作る際に留意した点

- 1) 親疎関係：話し手と聞き手との親しさの度合いは、どのように依頼の仕方に影響を与えるのか。
- 2) 非対称的な関係：聞き手が目上の人である場面に出てくるストラテジーとどう違うのか。
- 3) 依頼の負担：依頼の負担の高低によってインフォーマントがどのようにストラテジーを使い分けしているのか。

##### ②アンケート内容

場面1、2) あなたは昨日気分が悪かったので、大学の講義を休みました。その講義ノートを親しい日本人のクラスメートに貸してもらおうように頼みたいと思っています。その時にあなたはどうしますか。(親しくないクラスメートの場合は場面2)

場面3、4) 明日あなたは大学の授業で発表する予定でしたが、週末に友達があなたのところに遊びにきたため、発表の準備ができませんでした。そこで、発表の日を延期してもらおうように先生に頼みたいと思っています。その授業の先生はあなたとあまり親しくない日本人の先生です。その時にあなたはどうしますか。(親しくしている先生の場合は場面4)

場面5) 大学のレポートを書くためにあなたの先生の部屋にある本を貸してもらおうように先生に頼みたいと思っています。その先生はあなたと親しい日本人の先生です。その時あなたはどうしますか。

場面6) あなたはひどい風邪をひき、2週間入院することになりました。少し前に旅行をした時、お金を使いすぎたので、今入院費を払うお金を持っていません。親しい大学の友達に5万円貸してもらおうように頼みたいと思っています。(1ヶ月後お金を返

すと約束する）その時にあなたはどうしますか。

（2）考察

「依頼表現」以外の要素は全て常に現れるとは限らない。「依頼表現」以外の要素は依頼の負担を弱める戦略であるため、依頼を支持する戦略として扱う。依頼を支持する戦略は、呼びかけ→依頼を導入する言葉→依頼前提確認表現→謝罪→ぼかし表現→依頼の理由→依頼→保証する表現→懇願と、日本人話者と外国人話者、いずれの場合でも同じ順序に出てきた。この順序が日本語による依頼発話行為の典型であると思われる。

また、6場面における親疎関係、非対称的な関係、依頼の負担、この3つの要因によって、次の戦略が使い分けられている。：1 語形の切り替え（くれない→もらえない、あるいは、願望表現→聞き手の都合を聞く表現）、2 肯定形・否定形の切り替え（くれる→くれない）、3 「常体」と「丁寧体」の切り替え（くれない→くれませんか）。

全体的に「聞き手の都合を聞く表現」（～くれる、もらえない等）の方がよく使われたが先生が聞き手である場合、願望表現を使う割合が高い（下線部1）。

日本人話者は、親しいクラスメートにノートを借りる際「くれる」の否定形が多いのに対し、親しくない場合「もらえる」の否定形が多く使われている。しかし場面6では、親しいにも関わらず丁寧な「もらえる」の使用が多く、ノートより5万円の方が負担が高くなるためだと考えられる（下線部2）。

外国人学習者の場合は、同じ状況で「くれる」から「もらえる」の切り替えではなく、「常体」から「丁寧体」の切り替えが一般的に使われる（下線部3）。しかし韓国人学習者は、日本人に近い表現を使用しており、母語からの転移によると思われる。

そして、日本人話者は、「くれる」や「もらえる」の表現に「(か) なぁ」「(か) しら」というぼかし表現がつくことがある。このような表現をつけることにより、依頼を柔らかくすることができる。しかし、ぼかし表現はコミュニケーションに絶対に必要な表現ではなく教室内では普通教えられないことから、外国人学習者の回答には頻繁に出てこない。

（3）まとめ

①親疎関係が重視される場面では、日本人話者の場合、依頼表現の形式は切り替えるが依頼表現以外の戦略は殆ど切り替えない。それに対し、中国人とアメリカ人学習者の場合、語形より「常体」と「丁寧体」との間で切り替える人が多い。

②聞き手が目上の人である場面では、日本人、外国人話者どちらにおいても戦略の切り替えがすくなく、「願望表現」の使用頻度が高い。

③依頼の負担が高い場面における結果は、聞き手が親しくないクラスメートの場面の結果に近い。日本人、韓国人学習者は、ある語形からもっと丁寧さの高い語形への切り替えが多く、中国人、アメリカ人学習者は語形よりも、「常体」から「丁寧体」への切り替えが多い。

④一般的に、韓国人学習者の回答は、中国人、アメリカ人学習者の回答からは離れており、日本人話者の戦略に近い傾向がある。韓国語は最も日本語に近い言語であるため、戦略の使い分けが日本人に近いと思われる。しかし、韓国人学習者の回答にぼかし表現は少なかった。このことは、学習者の専門分野、日本語学習歴、勉学の目的などの影響だと考えられる。

2.2.2 日本語学習者の依頼におけるポライトネス戦略—日本語学習者の母語と日本語の比較—

和田、堀江、北原、吉本（2007）は日本語母語話者と日本語学習者における依頼表現の話し言葉を調査比較とし、日本語学習者の発話において母語と日本語とで違いはあるのか、また、依頼する相手（上下・親疎関係）によって表現の違いがあるのかを母語と日本語で比較・分析した。

（1）調査の概要

調査対象、中国人日本語学習者18名、韓国人日本語学習者6名の計24名。相手への負担度が小さいものから大きいものの5種類の状況を設定し、その状況においてどのように発話するか記入してもらい、分析する。設定をした状況は、以下の5つである。

- A1 ペンをかりたい
  - A2 借りる相手が使うかもしれない本を借りたい
  - A3 携帯電話を借りたい
  - A4 お金を借りたい
  - A5 招待状を書いてほしい（先生のみ）
- また、以下の上下・親疎関係を想定してもらおう。
- B1 対等な関係で親しい
  - B2 対等の関係だが親しくない
  - B3 上下関係であるが親しい
  - B4 上下関係であり親しくない

そして、回答の依頼文を分の構造により、前置き部分、本題、終結部分にわけ、前置き部分と本題の

順番や表出方法について分析するというものだ。

## (2) 結果と考察

### <韓国人と中国人の母語による依頼の比較>

韓国語で依頼の際に最も注意をしていたのは上下関係であった。親疎関係については、親しい相手も親しくない相手も同様の依頼表現をしているが、上下関係がある場合には、丁寧に謝罪の言葉を述べ、次いで状況・理由説明についても詳しく述べてから依頼の本題に入り、依頼本題のあとにもお礼や再び謝罪の言葉を発話するケースが多い。

逆に中国語の場合には、あまり上下関係による差はなかった。ほとんど同様の表現が使用されており、どちらかという依頼の負担度が高いと感じられる依頼の際に上下関係にある相手への説明が長くなっているようであった。

### <韓国人と中国人の日本語による依頼の比較>

韓国人日本語学習者は、日本語での依頼の際、母語である韓国語とほぼ同様の内容となっている。対して、中国人日本語学習者は、日本語での依頼の際、母語での依頼よりも丁寧な表現を使っているケースが多いようである。また、母語で謝罪を使用しない場合でも、日本語での依頼の際には多く使用していた。

## 2.3 日本語と中国語の依頼方略の特徴—先行研究のまとめ—

### 2.3.1 日本語母語話者と中国語母語話者の依頼方略の特徴

中国語では、親近度および距離度には、上下関係より親疎関係が影響を及ぼしているということである。また、日中語とも配慮度および改まり度については、上下関係に影響されやすい。目上の人に依頼する場面における、ポライトネス意識の強弱については、日中語では同じ傾向を示しているが、相手との親疎関係によって同一の機能的な発現頻度の増加と数種類の機能的な使い分けに違いが見られた。(李、2006)。親近度、距離度については、日本語より中国語の方が親疎関係に影響されているといことは、中国語の方が、親疎による依頼方略の使い分けははっきりしているということになる。

相原(2008)も日本語と中国語の依頼表現の使い分けについて論じている。日本語では、直接依頼文と間接依頼文の比率は変化するものの、どの相手においても直接依頼文よりも間接依頼文の出現率が高いのに対し、中国語では相手によって間接疑問文を使うか直接疑問文を使うかがはっきりしていると

している。この結果は、中国語の方が、相手との親しさや相手の地位が、間接疑問文を使うか直接依頼文を使うかという選択に大きな影響を与えている(相原、2008)。日本語ではどの相手に対しても遠慮がちに間接依頼文を用いるのに対し、中国語では相手との関係により直接表現を用い率直に依頼が行われると言えよう。

同様の知見は、李(2006)でも示されている。李は、ポライトネスの視点から中国語と日本語の依頼表現を観察し、中国人の依頼は感性的であり、親しさを表現するポジティブ・ポライトネスを多用し、日本人の依頼は理性的であり、礼儀正しさを表現するネガティブ・ポライトネスを多用すると論じている。ポジティブ・ポライトネスは相手を評価したり、相手との親しさに言及する方略に現れる。例えば、翻訳を依頼するような場面で、「あなたの翻訳は素晴らしいよね」と相手の能力を評価したり、「あなたなら手伝ってくれるでしょ」と親しさを表現する方略が用いられる。これに対して、ネガティブ・ポライトネスは「わきまえ」を示すとも言われ、「迷惑をかけてしまうけど、すみません」と相手の負担に言及し謝ることで、相手への思いやりを示すのがネガティブ・ポライトネスの方略である。山岡・李(2004)は、この方略について、日本語には配慮を表現する派生的な文法形式が多数存在するのに対し、中国語にはそのような派生的な文法形式が少ないことを見出している(山岡・李、2004)。日本語ではさまざまな間接表現を用い、遠慮を表現したり、相手の負担に言及するネガティブ・ポライトネスが示されるが、中国語の依頼はより率直になされ、相手へ思いやりを示すより、相手への親しさを表現するポジティブ・ポライトネスが優勢であることが予想される。それでは、日本で日本語を学習した中国人日本語学習者の依頼表現はどのような特徴を持つのだろうか。

### 2.3.2 中国人日本語学習者の中間言語方略の特徴

日本語を学習していない中国人母語話者と、日本語を学習し、日本に在住する日本人母語話者とは、後者は日本の言語文化の影響を受け、より日本人の依頼方略に近づくのではないかとされている。つまり、中国人日本語学習者の依頼方略には、母語である中国語の依頼方略が干渉する部分と目標言語である日本語の依頼方略が影響する部分、そして表現

の簡略化に見られるような第二言語学習者独特の依頼方略が入り混じると考えられる。なお、本研究では、母語である中国語の干渉と、目標言語である日本語の影響に焦点をあてるため、母語である中国語で回答してもらった。このため第二言語学習者独特の中間言語方略については、考察から外している。

日本語と中国語の中間言語方略については、親疎関係が重視される場面では、日本人話者の場合、依頼表現の形式（語形）は切り替えるが依頼表現以外のストラテジーはほとんど切り替えないのに対し、中国人学習者の場合、語形よりも「常体」と「丁寧体」との間で方略そのものを切り替える人が多い。依頼の負担が高い場面においても、日本人話者は、ある語形からもっと丁寧さの高い語形への切り替えが多く、中国人学習者は語形よりも「常体」から「丁寧体」への方略の切り替えが多い（エレン・ナカミズ、1992）。日本語では依頼方略自体は定型化し単一であるのに対し、中国語学習者の依頼方略は、さまざまな方略が用いられることがうかがえる。

さらに、中国人日本語学習者の母語での依頼と日本語での依頼表現の違いを見てみると、中国人日本語学習者が日本語での依頼の際、母語での依頼よりも丁寧な表現を使っている場合が多いようである。また、母語で謝罪を使用しない場合も、日本語での依頼の際には謝罪を多く使用していた（和田、堀江、北原、吉本、2007）。そして、依頼の「予告」や「先行発話」において、差が見られたという知見もある。中国人留学生は「予告」を多くの者が用いており、会話の早い段階でその会話の意図が依頼であると相手に伝えている。また、日本人学生は依頼にあまり関わりがないと見られる「先行発話」が多く見られ、中国人留学生は、相手がはっきり断っている時は、依頼を繰り返さないが、否定的な反応を示すだけでは依頼を繰り返す。また、日本人学生は「詫びる」方略を頻繁に使用していることも見出している（小林、2004）。

こうして中国人日本語学習者の中間言語方略に関する先行研究からは、その依頼方略には母語の依頼方略と日本語の依頼方略の影響があることが予測される。それでは、依頼方略のどの部分に母語の干渉が残り、どの部分が日本語の方略の影響を受けるのだろうか。また、そのような方略の使用傾向と学習者の日本語学習歴とは関係があるのだろうか。

楊（2004）は、親しさを示す中国式ストラテジーであるポジティブ・ポライトネスの使用率は学習歴

とともに減少する傾向にあるが、日本式ストラテジーとされる遠慮を示すネガティブポライトネスの使用率は学習歴とあまり関係がないとしている（楊、2004）。中国人日本語学習者の親しさを示す依頼方略は、日本語学習歴が長くなると、減少するが、遠慮を示す依頼方略は日本語学習歴が長くても、なかなか身につかないことがわかる。

しかし、日本語能力による違いがあっても、日本語学習歴、日本在住期間が長ければ、中国人日本語学習者の依頼方略は同じような傾向を示すのだろうか。先行研究では、この点について論じた研究はほとんどない。そこで、本研究では、非日本語学習者と、日本に長期間在住する中国人日本語学習者に対し、依頼方略に関するアンケート調査を行うが、さらに後者を一級能力試験に合格した学習者と、まだ合格していない学習者のグループに分けた。これは、先行研究で言及されていない、日本語学習能力の違いによる、依頼方略の使用傾向を探るためである。

### 第3章 依頼表現についての調査

本研究では、日本人母語話者と中国人母語話者及び中国人日本語学習者の依頼方略に関する調査を行った。被験者に想定してもらった依頼場面は大学生が日常的に行うもので負担度が異なると考えられる4場面「駅への迎えを頼む」「携帯電話を借りる依頼」「一ヶ月前に貸した本の返却依頼」「約束した日時変更の依頼」を親疎上下関係の異なる相手に対しどのように表現するか、自由記述してもらった。

#### 3.1 調査の概要

##### <調査の方法と時期>

依頼場面を設定したアンケート用紙を日本人母語話者と中国人母語話者に配り、どのように依頼するかを記述してもらった方法をとった。質問紙の配布と回収は2008年6月から11月の間に行い、その後随時インタビューによる調査を加えた。

##### <被験者>

本研究では、中国人日本語学習者の母語の干渉を見るため、①在日年数0年、非日本語学習者（20代女性）10人、②在日年数5年以上、日本語検定1級以下（20代女性）11人、③在日年数5年以上、日本語検定1級所持（20代女性）11人、④日本人母語話者（20代女性）20人の被験者に協力をしてもらった。

##### <設定した依頼内容と依頼相手>

依頼場面は親疎関係や上下関係に日本文化圏より

中国文化圏のほうが影響されやすいという先行研究の結果をもとに作成した。在日年数5年以上の日本語検定1級所持者は日本語母語話者の依頼方略をどこまでとっているか、どの部分に母語の干渉が見られるかを見るため四つの依頼場面を設定した。

場面①「(駅から自宅まで歩いて帰るには遠いので) 駅まで迎えに来てほしいと頼む。」「因为从车站走回家, 路程太远。所以拜托拜来接一下。」

依頼相手: 家族(両親) <親・上>、親しい近所の友人 <親・同>

場面②「(ケータイを忘れてしまい) 電話をかけるためにケータイを貸してほしいと頼む。」「因为忘记带手机, 所以向别人借手机打电话。」

依頼相手: 親しい先輩 <親・上>、親しい後輩 <親・下>、親しい友人(同年代) <親・同>、親しくない友人(同年代) <疎・同>

場面③「(一ヶ月前に貸した) 本を早く返してほしいと頼む。」「希望拿回一个月前借出去的书。」

依頼相手: 親しい先輩 <親・上>、親しい後輩 <親・下>、親しい友人(同年代) <親・同>、親しくない友人(同年代) <疎・同>

場面④「(相談のために) 自分から申し出た約束を都合が悪いので日を変えてほしいと当日頼む。」「我主动定的约会, 因为突然那天有事, 所以想改时间。」

依頼相手: 親しい先生 <親・上>、親しくない先生 <疎・上>、親しい友人(同年代) <親・同>、親しくない友人(同年代) <疎・同>

<表現機能>

本研究では表現機能に注目をし、その発話頻度を見ていき、使用された表現機能について発話例とともに説明をしておきたい。まず、下記の表現機能をもとにアンケートを集計した結果を表3にて見ていく。

本研究では表現機能に注目をし、その発話頻度を見ていき、使用された表現機能について発話例とともに説明をしておきたい。まず、下記の表現機能をもとにアンケートを集計した結果を表3にて見ていく。

表3 表現機能

表現機能	機能説明	発話例
依頼	依頼の意を表す。	迎えに来て。返して。
質問(依頼)	依頼の意を質問型にして表す。	借りてもいい?
説明	事情・理由を話す。	ケータイ忘れたから、
呼びかけ	相手に呼びかける表現。	先生、先輩、
質問	相手の現在の状況や意見を聞いている表現。	本、読み終わった?
配慮	心配りを表す。	時間があれば、
謝罪	お詫びを表す。	すみません。
感謝	感謝の意を表す。	ありがとう。
相談	相手の意見を求める表現。	どうしましょう?
貢献	物などで奉仕するといった表現。	今度、ごちそうする。
提案	依頼の遂行を促すために、案を提示している表現。	タクシー呼んで(迎えに来て)。
急かし	相手を急がせる表現。	早く(返して)。
事実確認	すでにあったことを確認する表現。	前に本貸したよね?

### 3.2 調査結果

(1) 在日年数0年の中国在住非日本語学習者(中国人)の依頼

在日年数0年の非日本語学習者(中国人)が設定した①~④の依頼を行うと表現機能の使用は次の表4のようになった。例と共に説明をしておきたい。

場面①では家族、親しい近所の友人共に質問型の依頼よりも直接的な依頼の使用の方がやや多く見られ、質問、配慮に関しては家族と親しい近所の友人で差が見られた。家族にはしていない質問、配慮だが、親しい近所の友人には「你有空吗(時間ある?)」

と言った質問や配慮が見られ、相手の状況をふまえ断る余地をあたえていることがわかる。

場面②では、親しい後輩と親しい友人に質問型の依頼ではなく「手机借我打个电话(ケータイ、ちょっと使わせて)」と直接的な依頼をしているのに対し、親しい先輩と親しくない友人については直接的な依頼と質問型の依頼は半々となっている。謝罪機能については親しい後輩・親しい友人には見られず、親しい先輩・親しくない友人に「请问, 手机可以借我打个电话吗(ごめん、ケータイちょっと使わせてもらってもいい?)」と言うような形でやや見られる。

表4 「在日年数0年の中国在住非日本語学習者の発話機能」

	場面①		場面②				場面③				場面④			
	親上	親同	親上	親下	親同	疎同	親上	親下	親同	疎同	親上	疎上	親同	疎同
依頼	6	6	5	8	10	4	1	3	4	4	1	4	8	5
質問(依)	4	3	5	2	--	6	3	3	4	3	9	6	2	5
説明	2	1	3	3	4	3	1	1	--	--	10	10	10	10
呼びかけ	2	1	--	--	--	--	1	--	--	--	1	1	--	--
質問	--	3	--	--	--	--	8	5	3	4	--	--	--	--
配慮	1	5	--	--	--	1	--	2	2	5	--	--	--	--
謝罪	--	--	2	--	--	3	--	--	--	1	8	9	5	9
感謝	--	1	3	2	1	4	--	--	--	--	--	--	--	--
相談	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
貢献	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
提案	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
急かし	1	--	--	--	--	--	--	--	1	--	--	--	--	--
事実確認	--	--	--	--	--	--	4	4	3	4	--	--	--	--
依頼しない	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

この二点から、親しい後輩と親しい友人へのこの依頼はとても行いやすいものと言え、親しい先輩と親しくない友人には少し気を使う依頼と言える。しかし、謝罪よりも感謝の意を述べる者が多くポジティブに依頼していることがわかる。

場面③では他の依頼場面とは異なり、「书看完了么（本読み終わった？）」と言うような質問や、「上月借你的…（前に貸してた本…）」と言うような事実確認が頻繁に見られる。また、場面①、②と比べて直接的な依頼を避けているが、直接的な依頼をしなかった者全てが質問型の依頼をしているわけではない。「书什么时候看好（本はいつ読み終わる？）」と言った質問の使用が多くなっており間接的に依頼していることがわかる。またこのような質問、事実確認が見られるところから、依頼相手から何らかのアクションを期待していると考えられる。

場面④では、親しい友人に対する謝罪機能以外では、ほぼ全ての被験者が全ての依頼相手に対して依頼、説明、謝罪だけを使用している。しかし、直接的な依頼と質問型の依頼とでは差が出ている。この依頼場面での直接的な依頼と質問型の依頼は、親しい先生に対しては質問型の依頼に偏り、親しくない先生と親しくない友人がほぼ半々に分かれている。また、親しい友人には直接的な依頼に偏りを見せている。この依頼の場合、親しい友人には気兼ねなく頼むことができると考えられ、親しくない先生より親しい先生の方が質問型の依頼が多いことについて

は、親しくない先生に対しては事務的に対応をし、親しい先生に対しては、親しくない先生より気を使うなどの感情が入るためだとインタビュー調査で答えている。また、他の依頼場面と比べると説明と謝罪の出現頻度が格段に上がっていることから、他の依頼場面よりも理由もふまえて理解してほしいものと見られる。また「不好意思，我那天有事，下一次好吗（すみません。あの日、用事ができてしまったんで日を変えてもらえませんか？）」のように「謝罪→説明→質問（依頼）」の順で依頼を行うが多く、この依頼場面④では定型表現があるようだ。

(2) 在日年数5年以上の日本語能力検定1級以下の日本語学習者（中国人）の依頼

在日年数5年以上の日本語学習者で日本語検定1級以下の者が、設定した①～④の依頼を行うと表現機能の使用は次の表5のようになった。

場面①では、在日年数0年の非日本語学習者同様に質問型の依頼よりも直接的な依頼の使用の方がやや多く見られる。また家族への説明に関して見ると在日年数0年の非日本語学習者より、やや増えている。しかし親しい近所の友人に関しては説明の機能は在日年数0年の非日本語学習者と同様あまり見られない。配慮に関しても、近所の親しい友人に対し半数の者が使用しているが、家族へはあまり使用しておらず「我在车站，快点来接我（駅にいるから、早く迎えに来てほしい）」と言った説明と依頼の形

表5 「在日年数5年以上の日本語能力検定1級以下の日本語学習者（中国人）の発話機能」

	場面①		場面②				場面③				場面④			
	親上	親同	親上	親下	親同	疎同	親上	親下	親同	疎同	親上	疎上	親同	疎同
依頼	7	6	1	5	9	3	2	6	6	4	1	1	7	4
質問(依)	4	3	10	6	2	7	4	1	2	1	7	7	3	4
説明	5	1	3	2	--	3	4	3	5	5	9	8	9	8
呼びかけ	3	1	2	1	1	--	1	--	--	--	4	2	--	--
質問	1	3	--	--	--	--	6	4	4	5	--	--	--	--
配慮	2	5	--	--	--	--	2	1	2	3	--	--	--	--
謝罪	1	1	1	1	1	1	2	--	--	--	8	10	2	5
感謝	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
相談	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	2	--	1	--
貢献	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
提案	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
急かし	1	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
事実確認	--	--	--	--	--	--	6	8	5	5	--	--	--	--
依頼しない	--	--	1	--	--	1	--	--	--	1	--	--	--	--

が多く見られ、家族にはほぼ迎えに来てもらえると言う前提で依頼をしており、また近所の親しい友人には「有时间吗，来接我一下我吗（時間があれば、ちょっと迎えに来てくれない？）」と言った配慮と依頼の形が多く見られ、近所の親しい友人には断る余地を残した依頼となっていることがわかる。

場面②では、親しい先輩へ対して質問型の依頼に偏り、親しい後輩に対しては半々、親しい友人では直接的な依頼に偏り、親しくない友人では親しい先輩ほどではないが質問型の依頼に偏りを見せている。依頼を質問型にすることにより依頼相手に断る余地を与え依頼相手が負うであろう負担を軽減していると考えられる。また、親しい先輩と親しくない友人には質問型の依頼に偏ったことと合わせて考えても親しい先輩と親しくない友人にはやや行にくい依頼と言えそうだ。また、他の依頼相手には見られる説明が親しい友人には全く見られない。「电话接我一下（ケータイ貸して）」などのように直接依頼だけで終わっている者も多く、親しい友人にはとても行いやすい依頼内容と言える。

場面③では、依頼相手が親しい先輩である場合、質問型の依頼が直接的な依頼に比べやや多くなり、他の親しい後輩・友人、親しくない友人へは質問型の依頼ではなく、直接的な依頼を用いている。在日年数0年の非日本語学習者に比べると依頼機能は多く使用されている。しかし、直接的な依頼と質問型の依頼を合わせても全員がどちらかの依頼を使用し

ているわけではなく「我要用一下上回我借你的书，你看完了吗（前に貸してた本使いたいでけど見終わった？）」のように説明、質問、事実確認で終わらせている者もあり、依頼相手からの何らかのアクションを期待していると考えられる。また、在日年数0年の非日本語学習者と違うところは説明の機能が増えているところだ。依頼相手に自分の状況を理解してもらいたい現れだろう。よりスムーズに自らの依頼を達成させるために依頼場面①、②とは全く違う被験者の意図が見られる。親しい先輩に関しては、自分が貸した本を返してもらうのに謝罪の機能も見られる。気をまわしている印と言えるだろう。場面④では、在日年数0年の非日本語学習者と同様、依頼、説明、謝罪の機能に偏っている。直接的な依頼と質問型の依頼の依頼相手に対する使い分けも在日年数0年の非日本語学習者と似ている。説明、謝罪の機能も似ており、他の依頼場面と比べ高頻度で使用されていることから、他の依頼場面よりも理由もふまえて理解してほしいものと見られる。

(3) 在日年数5年以上の日本語能力検定1級合格の日本語学習者（中国人）の依頼

在日年数5年以上の日本語学習者で日本語能力検定1級所持者が、設定した①～④の依頼を行うと表現機能の使用は次の表6のようになった。

場面①では、家族に対しては質問型の依頼ではなく直接的な依頼に大きく偏り、逆に親しい近所の友

表6 「在日年数5年以上の日本語能力検定1級合格の日本語学習者（中国人）の発話機能」

	場面①		場面②				場面③				場面④			
	親上	親同	親上	親下	親同	疎同	親上	親下	親同	疎同	親上	疎上	親同	疎同
依頼	9	2	2	5	9	2	3	2	5	2	1	--	7	3
質問(依)	2	9	9	6	2	5	1	3	3	5	10	9	1	8
説明	10	6	7	7	2	5	4	4	2	5	11	10	11	11
呼びかけ	4	2	6	3	4	2	5	3	3	2	5	5	2	--
質問	--	4	--	1	1	1	9	6	4	5	--	2	1	--
配慮	--	4	--	--	--	1	1	--	--	--	--	--	--	--
謝罪	--	1	4	--	3	5	3	--	--	2	10	11	5	9
感謝	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
相談	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
貢献	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	1	--
提案	1	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
急かし	--	--	--	--	--	--	--	--	2	--	--	--	--	--
事実確認	--	--	--	--	--	--	8	9	3	5	--	--	--	--
依頼しない	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

人に対しては直接的な依頼ではなく質問型の依頼に大きく偏りを見せた。そして、「你有空吗（時間ある？）」などの質問や配慮に関しては家族に対しては全く使用されておらず、親しい近所の友人に対してのみ半数の者が使用している。説明に関しては半数以上の者が使用しており、家族に対してはほぼ全員が使用している。実際の依頼文を見てみると「我在…、出来接我一下（私…にいるんだけど、ちょっと迎えに来て）」のように依頼していることから家族に対しては断らないことを前提に依頼していると言えるだろう。また、親しい近所の友人には、間接的な質問型の依頼を使用し、状況の説明、相手の状況への質問、配慮を行っていることから、親しい近所の友人には断る余地を与え負わせるであろう負担に気を配り依頼しているということがわかる。

場面②で直接的な依頼と質問型の依頼を比較してみると、在日年数5年以上の日本語学習者で1級以下の者とほぼ同じ使用数となっている。説明の機能は、親しい友人以外に高頻度で使用され、謝罪の機能に関しては親しい後輩以外での使用が見られることから親しい後輩と親しい友人に対してこの依頼は行いやすいものだと考えられる。

場面③では、直接的な依頼と間接的な依頼で大きな偏りは見られなかったが、親しい先輩と親しい友人に対してはやや直接依頼が多く、親しい後輩と親しくない友人に対しては、やや質問型の依頼が多く

なっている。親しい先輩を見てみると、ほぼ全ての者が「书用完了吗（本は読み終わった？）」などの質問をしたり、自分が貸したにも関わらず、「不好意思，我的书能还给我吗（ごめん、私の本、返してもらってもいい？）」と言うような謝罪まで親しい先輩と親しくない友人には使用しているこのことから気を使っていることがうかがえる。親しい友人に関して見てみると、質問型の依頼ではなく直接的な依頼の方がやや多いだけでなく、説明、質問、事実確認が他の依頼相手と比べてやや少なく「快点还我的书啊（早く私の本を返して）」のような急かしの機能まで出てきていることから、あまり気を使わず依頼を行っていることがわかる。

場面④では、親しい友人に対しての謝罪以外で、ほぼ全ての被験者が依頼と説明、謝罪の表現機能を使用している。また依頼相手によって直接的な依頼か質問型の依頼を使用するかははっきりと分かれた。親しい友人に対しては、「我那天突然有事，改天吧（あの日、急に用事ができて、他の日にして）」のように直接的な依頼を用い謝罪は半数にとどまったのに対し、その他の先生、親しくない友人に対しては直接的依頼ではなく「不好意思老师，我突然有事去不了，改个时间好吗（すみません、先生。急に用事ができていけなくなりましたが、時間を変えてもらってもいいですか？）」のように質問型の依頼を用い、謝罪機能もほぼ全ての者が使用した。先生、

表7 「日本語母語話者の発話機能」

	場面①		場面②				場面③				場面④			
	親上	親同	親上	親下	親同	疎同	親上	親下	親同	疎同	親上	疎上	親同	疎同
依頼	15	4	--	--	7	--	4	5	10	4	--	2	2	2
質問(依)	4	13	20	20	13	18	11	12	7	10	17	16	14	14
説明	6	7	14	10	13	11	5	3	3	5	13	14	15	16
呼びかけ	--	--	1	--	--	--	3	--	--	--	2	2	--	--
質問	--	2	--	--	--	--	6	6	7	5	--	--	--	--
配慮	--	5	1	--	--	1	3	2	2	1	3	3	1	1
謝罪	3	6	11	13	10	12	6	2	1	3	18	18	20	19
感謝	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
相談	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
貢献	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
提案	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
急かし	--	--	--	--	--	--	1	--	2	2	--	--	--	--
事実確認	--	--	--	--	--	--	5	7	6	6	--	--	--	--
依頼しない	--	3	--	--	--	2	--	--	--	2	--	--	--	--

親しくない友人に対し親しい友人へは依頼が行いやすい相手だと言えるだろう。

#### (4) 日本語母語話者の依頼

日本人(日本語母語話者)が、設定した①～④の依頼を行うと表現機能の使用は次の表7になった。

場面①では、家族と親しい近所の友人に対して依頼の仕方をはっきりと変えている。家族に対しては、圧倒的に多く直接的な依頼を用い、近所の親しい友人に対しては逆に直接的な依頼ではなく間接的な依頼を多く使用している。その他の機能を見ても、質問、配慮が近所の友人に対してしか現れず、謝罪に関しても家族より近所の親しい友人の方が多く見られる。そして「頼まない」と答えた者もあり、日本人にとってこの場面①の依頼は親しい近所の友人に対し、気を遣う以上にとっても頼みにくいものだということがうかがえる。また、家族だけを見ても「迎えに来て。」のようなシンプルな依頼をしていることも多く、親しい友人へのような複数の表現機能の使用は見られず、家族に対しては行いやすい依頼と言えるだろう。またインタビューから、この依頼は家族に行ったことは数え切れないほどあるが、友人には行ったことがないことがわかり、そのことが家族と親しい近所の友人の発話機能の使用の違いに関係していると考えられる。

場面②では、表現機能はとて偏ったものとなっている。「ごめん、ケータイ忘れてしまったから借

りてもいい?」と言うような質問型の依頼、説明、謝罪をどの依頼相手に対しても行うと言った定型表現が見られる。ただ親しい友人に対しては他の依頼相手には見られない直接的な依頼が見られる。依頼相手の中で一番依頼がしやすい相手だと言える。

場面③では、主に直接的な依頼ではなく質問型の依頼、を使用しているが、親しい友人に関しては他の依頼相手とは異なり質問型の依頼ではなく直接的な依頼がやや多くなっている。また他の依頼場面では見られなかった質問と事実確認の機能がこの場面④ではどの依頼相手に対しても使われている。日本人に関しても、質問、事実確認はこの表現機能を使うことにより相手からのアクションを期待していると考えられる。このことを踏まえても親しい友人だけに直接依頼が見られることや、他の依頼相手に比べ謝罪が少ないこと、急かしの機能が見られることから親しい友人には比較的行いやすい依頼と言える。

場面④で使われている表現機能に関しても全ての依頼相手を通じて同じような依頼を行っている。質問型の依頼、説明、謝罪である。謝罪に関してはほぼ全員がどの依頼相手に対しても使用している。このようなことから、日本人被験者の場合依頼相手によって表現機能をあまり変えないことがわかった。しかし、依頼相手によって言葉使いを使い分け、丁寧度を使い分けているようだ。また、依頼に型があるのは行いやすい依頼のようだが他の依頼場面①、②、③と比べ多く謝罪を使用しているところから、

被験者が考える相手に負わせるであろう負担は大きいと考えられ、配慮の意思がうかがえる。

（5）中国語母語話者、中国人日本語学習者及び日本人の駅への迎えを頼む依頼方略の相違について

この場面①の依頼は、中国人非日本語学習者と日本語母語話者とではやはり違いが見られた。中国人非日本語学習者は家族、親しい近所の友人共に直接的依頼の方がやや多い。また、親しい近所の友人に対しては半数の中国人非日本語学習者が配慮を示しているが、その他の表現機能については偏った使用は見られない。それに対し日本語母語話者は家族と親しい近所の友人とでは直接的な依頼と質問型の依頼の使用が分かれた。家族を見てみると、直接的な依頼に偏り、他に説明と謝罪の使用も見られるがその他の機能は全く見られないことから、定型表現のようなものがあると考えられる。また、親しい近所の友人に対してはそのような全体的な偏りはないが、中国人非日本語学習者とは違い質問型の依頼に偏る。この直接的な依頼と質問型の依頼の使い分けは中国人日本語学習者で1級所持の者にも見られた。1級を持っていない中国人日本語学習者は非日本語学習者と同様の使い分けをしている。しかし、謝罪の機能に関しては日本語母語話者にしか見られない。

（6）中国語母語話者、中国人日本語学習者、日本人のケータイ電話を借りる依頼方略の相違

場面②の依頼は日本語母語話者に限り全ての依頼相手に通じて<謝罪→説明→質問型の依頼>の表現が見られるが定型表現と言えるほどの偏りは見られない。そして、他の被験者とは違い感謝の機能の使用が見られる。場面①で中国人被験者には見られなかった謝罪だがこの場面②では見られ、特に中国人日本語学習者で1級所持の者に多く見られる。また、この場面②では直接的な依頼と質問型の依頼の使い分けについては1級を持っていない者も1級所持の者と同様に非日本語学習者より日本語母語話者に近い。しかし日本語母語話者にはあまり見られない呼びかけの機能を使うなど母語の干渉も見られる。

（7）中国語母語話者、中国人日本語学習者及び日本人の一ヶ月前に貸した本の返却依頼方略の相違

場面③の依頼は、場面①、②では使用されなかった表現機能、事実確認がどの被験者にも見られた。質問もどの被験者にも多く見られ、依頼機能自体使

用しない者も多く相手の返答に期待する依頼内容になっていると言える。しかし被験者によって表現機能の利用は異なる。親しい後輩・友人に直接的な依頼を行っている1級を持っていない中国人日本語学習者に対し、1級を持っている中国人日本語学習者と日本語母語話者は親しい友人に対し直接的な依頼を使用した。しかし日本語母語話者ほどの偏りは他の被験者には見られなかった。

（8）中国語母語話者、中国人日本語学習者及び日本人の約束の日時変更の依頼方略の相違について

場面④の依頼では、やはり日本語母語話者には定型表現が見られ、依頼相手に関わらず、<謝罪→説明→質問（依頼）>の形をとっているが、この場面④では他の被験者にも日本語母語話者と同じような偏りが見られた。1級を持っている中国人日本語学習者は親しい友人に対しては直接的な依頼を多く使用しているところが違う点である。また、1級を持っていない中国人日本語学習者は1級を持っている中国人日本語学習者と同様、親しい友人に直接的な依頼を多く使用し、親しくない友人に対しては直接的な依頼と質問型の依頼が半々となっている。また、中国人非日本語学習者は1級を持っていない中国人日本語学習者と同様、親しい友人に対しては直接依頼をし、親しくない友人に対しては直接的な依頼と質問型の依頼が半々、そして親しくない先生に対しても直接的な依頼と質問型の依頼が半々になっており、学習歴順に日本語母語話者に近づいている。

本研究では、「駅への迎えを頼む」、「携帯電話を借りる依頼」、「一ヶ月前に貸した本の返却依頼」、「約束した日時変更の依頼」という四つの場面を設定し、親疎上下関係の異なる相手に対して、どのように表現するかについて検討するために、自由記述調査によるデータ収集を行った。調査の結果、中国人母語話者、日本に5年以上在住する日本語能力1級未取得の中国人日本語学習者、同じく日本に5年以上在住する日本語能力1級合格の中国人、日本語母語話者では、それぞれの場面で依頼方略の相違が見られることがわかった。次章では回答者による依頼方略の相違をまとめ、なぜそうした違いが現れるのかを、先行研究の知見を引用しながら、考察する。

## 第4章 考察

本章では、依頼方略は、中国語母語話者と中国人日本語学習者、そして日本語母語話者ではどのように違うかを、依頼の場面ごとにまとめ、その原因について考えている。

### (1) 駅までの迎えを頼む依頼の方略

場面①の依頼だが、まず中国在住非日本語学習者と日本語母語話者とは最も自分に近い存在であると考えられる家族と親しい近所の友人とで、どのような違いが出たのかを見ていく。

中国在住の非日本語学習者は家族、親しい近所の友人共に直接依頼が質問型の依頼より多く、日本語母語話者は家族には直接依頼を多く使うが親しい近所の友人へは質問型の依頼を多く取っていることがわかった。このことは、李(2006)の親密度、距離度については、日本語より中国語の方が親疎関係に影響されており、中国語の方が、親疎による依頼方略の使い分けははっきりしているという考えとは食い違う。日本人にとってこの依頼は家族に対しては日常的に行うものだが、親しい近所の友人へは日常的には行わない。このことが、日本語母語話者が家族に対し直接依頼が増えた要因と考えられる。また、「迎えを友人に頼むのであればタクシーを呼ぶ」と言ったコメントも日本人からは得られた。日本人が考える依頼相手への負担の重さがうかがえるが、このような依頼は日本の家庭に入らねばわからないことである。従って、日本語学習者が習う場はないので在日年数5年以上の1級以下の日本語学習者と在日年数5年以上の1級合格の日本語学習者に違いはないと考えたが、在日年数5年以上の1級以下の日本語学習者は、中国在住非日本語学習者に近い依頼を、在日年数5年以上の1級合格の日本語学習者は、日本語母語話者に近い依頼を行っていた。しかし、謝罪表現は日本語母語話者にしか現れておらず、この謝罪機能に関しては、在日年数5年以上の1級合格の日本語学習者にも母語の干渉が見られる。

### (2) ケータイ電話を借りる依頼の方略

場面②の依頼は、ケータイを持っているというのが当たり前で、今、忘れた時に知人が近くにいると公衆電話を探すのではなく、その知人に借りるだろう。そこで、その依頼は親疎・上下の関係にどのような影響を与えているのかを見る。

この依頼で中国在住非日本語学習者は直接依頼を多く使っている。親しい友人・後輩へはもちろん、親しい先輩と親しくない友人に対しては半々と親疎・上下関係の影響をやや受けていると考えられる。それに対し日本語母語話者は、親しい友人に対してはやや直接依頼も見られるものの質問型の依頼に偏っている。このことは、相原(2008)が、依頼表現の日本語では、どの相手においても直接依頼よりも間接依頼の出現率が高いのに対し、中国語では相手により間接疑問を使うか直接疑問を使うかがはっきりしているとしていると述べていることと類似する。また、日本人ほどはっきりと分かれなかったが、在日年数5年以上の1級合格の日本語学習者も在日年数5年以上の1級以下の日本語学習者も中国在住非日本語学習者に比べ質問型の依頼が多い。しかし、親しい友人に対して直接依頼が多く、日本語母語話者とはやや異なっている。また、中国在住非日本語学習者にだけ感謝の機能の使用が見られ、直接依頼が多いことから、李(2006)が示しているように中国人の依頼は感性的で、親しさを表現するポジティブ・ポライトネスを多用していると思われる。

### (3) 一ヶ月前に貸した本返却の依頼の方略

場面③の依頼は、他の依頼場面では見られなかった事実確認の機能が多く使われていた。この事実確認の機能は「前に本貸してたよね?」というふうに使われており、相手の返答に期待していると考えられる依頼内容になっている。また質問の機能も「本読み終わった?」というものが多く、事実確認の機能と同じように軽減表現と言える。そして意外なことに、この軽減表現は日本語母語話者より非日本語学習者と中国人日本語学習者に多くみられた。しかし、質問型の間接依頼を日本語母語話者は頻繁に使っており、依頼の軽減に利用していると見られる。また、直接依頼に限って見るならば、在日年数5年以上の1級以下の日本語学習者は、親しい友人・後輩に直接的な依頼を行っており、在日年数5年以上の日本語学習者で1級所持の者と日本語母語話者は親しい友人だけに対し直接的な依頼を使用した。しかし、日本語母語話者のような直接依頼と間接依頼の使い分けの偏りは他の被験者には見られなかった。

### (4) 約束の日時変更の依頼の方略

場面④の自分からした約束を直前で変更するという依頼で、依頼する側に気遣いという負担がかかる

と考えられる。岡田・安藤（2001）は依頼相手との人間関係のあつかましき度について、日中共に、親しい相手であればあつかましき度は小さくなり、親しくない相手であればあつかましき度は大きくなる。また、中国人は親友からの依頼であれば、負担が大きくとも、感じるあつかましき度は小さいと述べている。この依頼場面では、どの被験者とも質問型の間接依頼を多くしている。しかし、日本語学習者、非日本語学習者に関わらず中国人被験者は親しい友人にのみ直接依頼を使用している。この依頼場面では他の依頼場面よりも日本人被験者の表現機能の使用に偏りが見られた。エレン・ナカミズ（1992）が日本語は依頼方略自体が定型化していると述べたように、日本語母語話者は定型表現を利用するようだ。しかし、在日年数0年の非日本語学習者と在日年数5年以上の日本語学習者で1級以下の者に比べ在日年数5年以上の1級合格の日本語学習者はより日本語母語話者に近い表現機能の利用が見られる。

最後に、四つの依頼場面に共通してみられた話者ごとの傾向をまとめる。

<中国在住中国語母語話者>

直接依頼が多く、場面によっては感謝の表現が見られるなど、ポジティブポライトネスの方略を用いる傾向が見られる。

<日本人母語話者>

定型化した間接依頼表現が多く、謝罪表現が目立つなど、ネガティブ・ポライトネスの方略を用いると言える。

<日本在住5年以上の中国人日本語学習者>

本研究では、中国人日本語学習者を「日本語能力1級資格合格者」と「日本語能力1級資格非合格者」に分け依頼表現を観察した。1級を持っている者は、より日本語母語話者の依頼表現に近く、非合格者は中国語母語話者の依頼表現に近い傾向が見出せた。優れた言語学習者は言語能力だけでなく、その社会文化のルールや習慣をより正確に観察すると言われるが、ここで扱った依頼表現についても、1級合格者は日本人母語話者の依頼表現をより細やかに観察し、習得していると言える。つまり、1級合格者の方が優れたモニター能力を保持し、依頼方略の選択や表現に影響していたと考えられる。

おわりに

本研究では、依頼相手の感じる負担度の度合いが

異なると考えられる四つの場面を設定し、親疎上下関係の異なる相手に対して、実際にどのように言うのか自由記述のアンケートとインタビューを通して日本語と中国語の依頼に関するストラテジーの検証を行った。依頼場面は親疎関係や上下関係に中国文化圏のほうが影響されやすいという先行研究をもとに作成した。調査の結果、中国人母語話者、日本に5年以上在住する1級未取得の中国人日本語学習者、同じく日本に5年以上在住する1級合格の中国人、日本語母語話者では、それぞれの場面で依頼方略の相違が見られた。中でも中国在住中国語母語話者が依頼をする段階で使う感謝の表現は日本人にはそのような発想自体ないのである。日本語母語話者は依頼相手に関わらず、定型化した間接表現が多く、表現機能ではなく言葉使いで相手への敬意を使い分けしている。また中国在住中国語母語話者とは反対に謝罪表現が目立つが、この謝罪の使用も定型化された表現であり、ポジティブ・ポライトネスの方略を用いる中国語話者は、発想の転換が必要と言える。しかし、その発想も日本文化や習慣、日本人に触れない限り持てるものではない。1級合格者がより日本語母語話者に近い依頼を行えるのは、言語習得能力だけではなく、日本文化や習慣などに触れ細かな部分まで理解しているからである。しかし、日本語母語話者と全く同じストラテジーを行っているわけではなく、一層の日本語教育の研究が望まれる。依頼表現は、その捉え方、表現に使用される機能など日々変容している。近年、外国との交流も増え様々な文化が日本に入ってきている。そのような動向も柔軟に捉えられることが円滑なコミュニケーションのポイントになるだろう。そして、日本語教育を行う上で学習者の文化や習慣などを理解することも学習者の日本語習得に大きく影響すると考える。

文献

- 相原まり子『依頼表現の日中対照研究—相手に応じた表現選択—』『言語情報科学』東京大学大学院、2008.
- エレン・ナカミズ『日本語学習者における依頼表現—ストラテジーの使い分けを中心として—』大阪大学紀要、1992.
- 岡田安代・安藤美保『中国人と日本人の依頼の許容範囲』愛知教育大学教育実践センター紀要、2001.
- 川村陽子『対人コミュニケーションにおけるポラ

- イトネスの諸相』『人間と環境—人間環境学研究報告』2、1998.
- 巖延美『日本語と朝鮮語における依頼の仕方の対照研究』関西学院大学紀要、2004.
  - 小林有加『中国人留学生と日本人学生との依頼会話—依頼応答から終結までを中心に—』日本語教育と異文化理解 第3号、2004.
  - 高殿良博『日本語とインドネシア語における依頼表現の比較』国際関係紀要、2000.
  - 山岡政紀・李奇楠『依頼表現の日中対照研究』北京大学日本文化研究所・創価大学文学部紀要、2004.
  - 楊 雪丹『依頼のストラテジーの中日対照』日本語教育と異文化理解 第3号、2004.
  - 李宜真『依頼の言語行動に関する日中語対照研究—ポライトネスの観点から—』東北大学大学院国際文化研究科紀要、2006.
  - 和田由里恵、堀江薫、北原良夫、吉本啓『日本語学習者の依頼におけるポライトネスストラテジー—日本語学習者の母語と日本語の比較—』東北大学高等教育開発推進センター紀要、2007.